

マラッカの肥前磁器貿易

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
URL	所属:
	http://hdl.handle.net/2297/2976

マラッカの肥前磁器貿易

盧泰康

(訳：野上 建紀)

1 前言

マラッカはマレー半島西岸に位置している。季節風が交接する地にあり、東西海上航路の交通の要衝地である。16世紀初、ポルトガル人は東進してインド洋を経て東南アジア海域へ入った。そして、マラッカ港はポルトガルが東方貿易を独占するための主要な目標となり、1511年にはポルトガル人はマラッカを占領する。ポルトガル王国の統治期間、マラッカはインド領 (*Estado da India*) の第2の都市と見なされ、貿易と宗教の中心となった。東南アジアの香料、インドのグジャラートやコロマンデルの布生地は全てこの都市を主要な集散地としていた。日本や中国の物資はマラッカを中継して西方へ運ばれるようになった (Newitt2005:165-167)。1641年になるとマラッカは再びその主を替えることになる。5ヶ月間にわたって包囲された後、ポルトガル人はついに開城し、マラッカはアジアに数多く点在するオランダ東インド会社 (VOC) の拠点の一つとなる。オランダ人がマラッカを経営した期間 (1641～1824年)、日本の肥前磁器は重要な商品となった。しかし、これまでマラッカで確認された肥前磁器やその貿易状況について報告されたものはほとんどない。そこで本報告はマレーシアで見られる日本の肥前磁器を紹介し、文献史料と合わせて17世紀後半から18世紀初に至るまでの肥前磁器のマラッカにおける貿易状況を試論することを主要な目的とする。

2 マレーシアで見られる肥前磁器

マレーシアで見られる日本の肥前磁器は3種類に大別される。

第1類は染付磁器である。図1は現在、マラッカのSTADTHUYS博物館に収蔵されている染付花鳥文芙蓉手皿である。この類の染付皿は中国の海外輸出用の「カラック」磁器を模倣したものであるが、文様や装飾は肥前独自の特色を有している。1660～1680年代頃に有田の内山諸窯で生産されたものである。東南アジアではインドネシアのパサール・イカン (Pasar Ikan)

遺跡出土品の中に類似した製品が見られる (佐賀県立九州陶磁文化館 1990: 図 151)。図2は染付花鳥文VOC字入り芙蓉手大皿である。現在、クアラルンプール国立博物館に収蔵されている。内面中央にVOCの文字が入るもので、オランダ連合東インド会社が日本に注文して焼かせたことが明らかな代表的な種類のものである。1690～1730年代頃に有田諸窯で焼かれたものである。図3は染付花盆文大皿である。現在、クアラルンプール国立博物館に収蔵されている。内面中央部には折枝松樹花草盆と欄干が描かれ、内側面と折縁部には纏枝花草文が描かれている。17世紀末～18世紀初に有田諸窯で生産されたものである。

第2類は色絵磁器である。図4は色絵花盆文芙蓉手皿である。現在、クアラルンプール国立博物館に収蔵されている。内面中央部には折枝松樹花草盆と欄干が描かれ、内側面と折縁部は芙蓉手スタイルの文様が描かれている。文様や配置は17世紀の中国のカラック磁器を模倣したものと同様であり、1650～1670年代頃に有田内山諸窯で焼かれた製品である。

第3類は青磁である。図5は青磁刻花文皿である。出土地はマラッカのJonker街である。内面には陰刻による花草文が入り、底部の畳付き部分は幅が広く無釉である。17世紀後半の波佐見窯の製品である。図6は青磁印花文皿である。マラッカのJonker街で出土したものである。内面には印花草文が入る。底部内部は蛇の目状に釉剥ぎされており、鉄錆が塗られている。高台は細く成形されており、施釉されている。17世紀後半に有田諸窯で焼かれたものである。類似した青磁皿は、マレーシア東部の伝世品 (図7, Harrison1995: pl.24より引用)、インドネシアのバンテン・ラーマ遺跡 (大橋康二 1990: 図 187) やティルタヤサ遺跡 (大橋康二・坂井隆 1999: 図版 7-9) の出土品に見られる。すでに13-14世紀には中国南方で焼かれた青磁が東南アジアに広く流行している。そして、17世紀後半には中国龍泉窯青磁を模倣して日本の肥前で生産された青磁が東南アジアに広く輸出販売されている。この地域に続いてきた需要の性格を示している。

3 17世紀後半におけるマラッカの肥前磁器貿易

マラッカは東南アジア経済の商業的中心であったが、1641年以後のオランダによる占領下ではその地位を後退させた。その理由は早くからオランダ連合東

インド会社がインドネシアのバタビアをアジアにおける貿易の中心として発展させることを決定していたことによる。両者を比較すると、バタビアはジャワや東インドネシアの経済富裕地域や人口密集地に近く、しかも西側には安全で容易なヨーロッパ航路を提供してくれるスンダ海峡があった。オランダ人にとってマラッカを攻撃占領することは、戦略面の理由から考えられたことであった。その他のヨーロッパ勢力を警戒するためにマラッカに拠点を築き、そして、マラッカを海上航運の基地とすることで海峡を通過する自社の船を保護するようにした。全体の貿易の利益のためには、オランダ人はマラッカがバタビアの競争相手にならないような措置を講じなければならなかった。VOCの管理体制の中ではマラッカはその貿易ネットワークの一植民地にすぎず、マラッカに駐留する VOC の官吏達はバタビアの命令に直接従い、定期的にバタビアへ報告を送っていたのである (Tol1998:10)。

17 世紀中頃以降、中国の明末清初の戦乱の影響により陶磁器の輸出が困難になったことから、オランダは日本の肥前陶磁を購入することに転じ、海外市場の需要に応えることにした。オランダの文献記録をみると、オランダ領時代のマラッカは、その重要性が以前ほど大きなものではないにせよ、インドや西アジア航路へ通じる海峡の要衝に位置することから、17 世紀後半においても依然としてアジアの陶磁器貿易上で、重要な地位を占めていた。オランダ東インド会社はベンガル、インド東岸のコロマンデル、セイロン、インド西岸のスラット、ペルシアやモカに向けて日本の磁器を輸出したが、非常に多くのものがマラッカを中継して運ばれていた。さらに購入する際の便宜上、磁器の注文書が直接マラッカから出島商館へ出されることもあったし、日本を出帆した船が直接マラッカへ入港していた。1659 年 5 月 27 日にマラッカから出島のワーヘナールに宛てた書状の内容を例にあげる (Volker1971:129-131)。

「貴殿ははじめてモカへ送る契約をされるが、これに関してはブーシェリオン閣下の手頭（見本）に従い、以下のような磁器を製作されるように」そして、彼らは可能かどうかを求めている。「おそらく、次の北の季節風を利用し、台湾経由でマラッカに送り、そこから他の商品と一緒にモカに送ることが可能かどうか」「もし不可能ならば翌年はバ

タビア経由にしないこと、なぜならモカからの船が再び十一月の初めにバタビアからマラッカに向かうため。」

この他、マラッカはマレー半島自体の陶磁器消費のための重要な輸入港でもあった。これら VOC が輸入した日本の貿易磁器には、直接日本に向けて注文し、購入した後にマラッカに運ばれてくるもの (Volker1959:14,16,20; 1971:155,156,158,162,177) や バタビアを経由して運ばれてくるもの (Volker1959:14,15; 1971:187,188) があった。

17 世紀後半のアジアの中国商人の貿易システムにおいても、マラッカは日本磁器を得るための入手ルートの一つであった。『華夷変態』記載の史料を例にあげる。すなわち、王順官、黄賢因、徐佛官、呉天地等の中国籍海商がマラッカ―中国―日本の三角貿易を営んでいたとある。類似した内容の記載はオランダ側の文献にもあり、例えばマラッカ商館日記の 1685 年 2 月 15 日によれば明らかに中国の船が日本の磁器を積載して入港している (Volker1959:15)。

バタビアの中国のジャンク船主 Ongoeljua は日本から 100 梱の磁器環、50 梱の碗、100 梱の軍持 (gorgelet)、そして 200 梱の皿を積載して、46 日航行して当地に到着した。

4 結語

以上の討論をとおして、1641 年以後にはマラッカの経済貿易の地位は以前ほどではないにしてもその海上航路上の重要な位置にあることから、依然として多くのオランダ東インド会社の貨物がマラッカを中継して運ばれたことを知る。日本の肥前磁器を例にすると、マラッカはインド半島や西アジア市場へ輸出する中継港としての役割を担っている。そして、マレー半島自体の陶磁器市場についてはまだ明らかではないが、多くの中国商人がマラッカを経由した肥前陶磁器貿易を行っていた。

(訳者注)

図版及び参考文献については、原文（中国語版）と共通である。